

娘子を思ひて作る歌一首 并せて短歌

一七九二番

白玉の 人のその名を なかなかに 言を下延へ  
逢はぬ日の まなく過ぐれば 恋ふる日の 重なり  
行けば 思ひ遣る たどきを知らに 肝向かふ  
心碎けて 玉だすき かけぬ時なく 口止まず  
我が恋ふる児を 玉釧 手に取り持ちて まそ  
鏡 直目に見ねば したひ山 下行く水の 上  
に出でず 我が思ふ心 安きそらかも

反歌

一七九三番

垣ほなす 人の横言 繁みかも 逢はぬ日まなく  
月の経ぬらむ

一七九四番

立ちかはり 月重なりて 逢はねども さね忘ら  
えず 面影にして